

浅井忠《小丹波村》



風景画を数多く残している浅井忠は、若い頃からたびたび各地へ取材旅行に出かけているが、この武蔵國小丹波村（現在の東京都西多摩郡奥多摩町）をはじめとする八王子・奥多摩方面へは、よほど気に入ったのか、数度となく訪れている。この作品は、浅井忠数え年38歳、充実した時期の

作で、25歳の安子との結婚直後の写生でもある。民家の屋根の勾配とそれに呼応する山の稜線は、浅井の緻密な計算のうえに配置されており、画面に躍動感と安定感をもたらしている。浅井の描く風景画中の人物をみると、そこで生活している彼らに対する愛情がひしひしと伝わってくる。

朝熊山は山頂に臨済宗の名刹金剛証寺があり「朝熊かけねば片参り」といわれるように、伊勢参宮の習慣と結びつき、近世はとくににぎわった由緒ある場所である。

「旭日」を題材に全国を写生中であった藤島が、朝熊山をなぜ訪れたのか、そのあたりは定かでないが、1893年から3年あまり三重県尋常中学校助教諭として津に滞在した経験があり、三重県には少なからず親しみを覚えていたことだけは確かであろう。

当時の藤島は、力強い、簡潔な構図を目指したといわれる。細部にこだわらず、何の飾り気もない本作品にもそうした彼の意図が十分に伝わってくる。



藤島武二《日の出
（伊勢朝熊山よりの眺望）》